

## いつも心の中に

三年 池田結菜

私の亡き愛犬の名前は、父と母の名前の頭文字を取って「くま」です。通称はくーちゃん。くーちゃんと父、母、私の五人暮らしでした。

小学五年の夏、ある獣医さんのところに定期検診に行きました。私はいつもその診察についていたのですが、獣医さんの一連の流れは把握していませんでした。でも、その日はいつもの穏やかな表情ではありませんでした。聴診器を当てながら深刻そうな顔をし、ある病名を告げられました。僧帽弁閉鎖不全症。余命半年。目の前が一瞬にしてぼやけました。私はその言葉を信じる事ができず、お母さんと、勝手に流れてくる涙と共に、ただ呆然としていることしかできませんでした。

それからはくーちゃんの体調に、より一層気を配るようになりました。興奮すると心臓発作が起こってしまうので、ドアを静かに開閉したり、おもちゃやおやつで気を紛らわせたりしました。それでも発作を起こす頻度は多くなっていき、その度に私達は心が痛みました。

あの日から約一年経った六月三日の朝、私はいつも通りくーちゃんの前にパンの耳を置きました。すると、体調が悪くなってからは一度も食べなかったのに、この日だけは食べてくれました。言葉に表せないくらい嬉しかったです。次の日は運動会だったので、弟とうきうきしながら家に帰ってくると、おばあちゃんが来ていました。おばあちゃんの手には花束が。仕事に行っているはずの親の車もありました。その時、私はどうしても信じたくありませんでしたが、察してしまいました。心の中で、帰ったらいつも通り出迎えてくれると自分に言い聞かせました。でも、リビングに入った瞬間、涙が滝のように溢れ、その日は止まることはありませんでした。くーちゃんは、家族全員を見送って、お母さんが出かける直前に亡くなったそうです。しっかりと生きてきますと言えなかった。もっと遊んであげたかった。後悔だらけでした。それと同時に、今まで懸命に生きてくれてありがとう。幸せをくれてありがとう。涙のせいで上手く言葉にはできなかつたけど、できる限り感謝の気持ち伝えました。

翌日の運動会は、腫れた目など気にせず正々堂々と取り組み、児童会長、最上級生としての役割を果たすことができました。

この出来事は、私にとって一生忘れられない大切な時間になりました。最期のお別れの時は、くーちゃんをしっかりと目に焼きつけました。今は心の中で生き続けていると信じています。後悔なく楽しかったと思えるように、一秒一秒を大切に過ごしていきたいと強く思いました。くーちゃん、ありがとう。